

紹介

佐久間竜著

『日本古代僧伝の研究』

本書は、著者が一九五六年より一九七九年までの間に発表された論文十四篇を加筆の上収録した書である。甚だ簡略であるが、各篇の内容を紹介すれば以下のようになる。

一 官僧について

「官僧を「僧尼名籍にその名が記載され、さらには、公驗₁・度牒・戒牒を与えられた僧形のものすべて」と規定し、その官僧の把握を目的として毎年作成された僧名帳について考察を加え、更に得度・受戒・師位僧といった僧尼のたどる過程について個別に綿密な分析を試みている。特に師位僧については、得度₂・受戒₃・師位₄という一般的な過程以外にも、国家に対する功績によって例外的に師位を与えられた僧が存在したことを、行基を例に挙げて指摘している。

二 優婆塞・優婆夷について

優婆塞に関する堀一郎・中村元両氏の見解を批判して私度僧と優婆塞・優婆夷とは

明確に区別できたとし、優婆塞・優婆夷の有した性格及び彼らに与えられた課役免除・下級官人への登用等の特典について論じ、彼らを民衆の間に於ける知識仏教の担い手として評価している。

三 道昭

先学の諸説を踏まえ、天智・天武朝に於ける国家の仏教政策に対する検討・評価を試みた上で、道昭の、帰朝後民間教化と社会事業に尽力した民間教化僧としての性格と、その後飛鳥寺禅院に於いて法相教学を中心とした学団形成に大きな役割を果たした学問僧としての性格に論及している。

四 慈訓

慈訓の法相・華嚴兼学という教学内容とその現世的・呪術的色彩の濃い性格を指摘し、また行動面では、藤原仲麻呂との強い結び付きにより彼の政權下で僧綱として仏教政策推進の一翼を担っていたことや、孝謙₅・道鏡勢力との確執によって失脚に至る過程等について考察を加えている。

五 慶俊

慶俊がその広く深い教学に対する理解によって平安仏教を生みだすための先駆的役割を果たしたと評価し、光明皇后との関係

や法華寺大鎮或いは僧綱としての活躍について論じ、更には彼の愛宕寺開山説についても見解を示している。

六 安寛

安寛が、教学面では濃厚な現世的呪術的性格を基調としており、また行動面では、良弁配下の東大寺の要職或いは律学の大学頭という立場にあり、後に内道場禪師・道鏡政權下の大律師として活躍したことを論じている。

七 実忠

『東大寺要録』所収の「東大寺権別当実忠二十九ヶ条」の記載を中心に、良弁の目代として造東大寺司の運営に加わり、道鏡政權下では東大寺少鎮の地位にあり、鎮制度廃止後は「親王禪師」たる早良親王と結んで東大寺寺主或いは造瓦別当となり、早良親王の失脚・造東大寺司の廃止後も知事として東大寺の造営に携わった実務派僧実忠の活動の跡を追っている。

八 賢璟

道鏡的色彩が一扫された後に僧綱の一員となり、室生寺創建や多度神宮寺造営等に携わり、また桓武天皇や藤原種継・小黒麻呂といった人物と親交を保って長岡京及び

平安京への遷都にも関与したと目される賢環について考察し、その思想的基盤が「怨靈思想に対応しうるような呪術的な考え方や、仏教の日本的受容の一形態である神仏習合思想」にあったことを示している。

九 等 定

東大寺僧より西琳寺大鎮となり、のち東大寺別当に任ぜられた等定について、その別当任命が桓武天皇及び当時の僧綱との浅からぬ関係より遷都挙行の布石としての意義を有していたのではないかと推論し、僧綱に任ぜられた後は延暦十年代の桓武天皇による一連の仏教統制政策に関与したことや、僧綱辭任後梵釈寺の充実発展に寄与したことも論及している。

十 道慈伝の一齣―『愚志』を中心に―

続紀の道慈伝に見える『愚志』について、そこにいう「虚設」の意味するものを、当時の社会に於ける僧尼の実態や国家の仏教政策の方針を踏まえて考察し、『愚志』著述の動機と共に、それが天平六年の得度基準の設定や戒師招請計画に結びつくものであったことを指摘している。

十一 惠俊(吉田連宜)と弁紀(春日蔵首

老)―還俗僧の万葉歌人―

還俗僧で万葉歌人である惠俊・弁紀の出家・還俗を問題としてとり上げ、当時の出家・還俗の実態、特に出家については、それが後世のように僧俗間に一線を画する重要な意義を有するものでなく、僧俗の生活に顕著な差が認められぬといった事態も存在していたことを示し、そういった僧尼の実態に対処すべくなされた国家の僧尼育成策について考察を加えている。

十二 渡来後の鑑真―戒師招請をめぐる問題―

天平五年の戒師招請計画を企てたのが舎人親王・隆尊であるという『東大寺要録』の記載に基づく旧説を批判してそれが弁浄・神寂・道慈といった当時の僧綱により僧尼育成策の一環としてなされたものであるとし、鑑真渡来後については、授戒方式上の変化として戒牒発行の最高権限が治部省より戒師に移行した事実を示し、更には、旧戒を主張する人々との間に生じた対立や鑑真の僧綱就任及び辭任の意義等について論じている。

付篇一 他田水主とその一族

正倉院文書の記載をもとに美濃出身の他田水主たる人物が天平十八年より同二十一

年の間に写経所を中心に下級官人としての生活を送った跡を追い、その人物像を明らかにすると共に、彼の一族と思しき人物が縁故を頼って上京し、出家或いは下級官人への道をたどった事例を挙げて、地方の民衆が中央に進出する経緯について考察している。

付篇二 越前国医師六人部東人

一切経の書写を唱導し、また東大寺野地の占定にも加わった越前国医師六人部東人の姿を通じて、国衙の下級官人としての性格、或いは仏教における化主的な性格をも有していた当時の国医師の実態を明らかにしようと試みている。

奈良時代の仏教史に関する研究は、国家仏教という当時の仏教の性格に対する関心や残存する史料の性格により、僧尼令を初めとする諸法令を対象とした制度史的な研究、或いはまた、政権担当者との関係といった政治史的な研究がこれまで主流を占めていたような感がある。そのような中で、著者は長年に及び個別の僧を対象とした研究を続けられ、そこから当時の仏教の諸相を究明しようと努めてこられた。無論、こういった研究が他に見えぬ訳ではないが、

その対象が主として行基や鑑真等の比較的史料を多く有している有名僧に限られていたのに対し、著者は、後世の伝記等の史料を援用することによって対象の枠を広げられ、それまで特に問題とされることのなかった僧にまで考察を加えられている。

後世の史料を援用する場合に最も慎重さを要求されるのは、言うまでもなく付加された説話的な部分と史実を反映した部分とを判別する作業である。一級史料が数少ない奈良時代の僧に関しては、その判別は困難を極め、それ故にどうしても推論の域を出ないのも余儀ないことと言える。しかし、そういった場合に於いても、著者は緻密な史料分析により事実の究明に努められている。このような著者の実証的研究の方針は、問題点に対する着眼と、背後の社会的情勢をも加味した研究の姿勢と共に、後学の我々が最も規範とすべきものであり、その意味において、著者の長年に及ぶ研究の成果が集約された本書が出版されたことは誠に意義深いことである。本書は、今後の古代仏教史研究の規範書として、また新たな研究の出発点として不可欠な一書と言うべきであろう。

(A5判 三〇三頁 一九八三年四月
吉川弘文館 五五〇〇円)
(本郷真紹 京都大学大学院生)

中村賢二郎
平編
倉塚

『宗教改革と都市』

本書は表題をテーマとする研究会の五年にわたる共同研究の成果である。この「宗教改革と都市」というテーマ自体、「特殊専門的」と思われるかもしれない。しかし都市の民衆に担われた運動こそ、ほとんど唯一の宗教改革運動であるという見解を、この表題は示しているのである。

この間の事情を、本書は序説と第一章の研究史において明らかにしている。まず序説では、教会の情況、改革理念、諸身分の動向が述べられ、宗教改革時代のドイツを俯瞰した上で、「宗教改革は都市的事件であった」ことが示される。

第一章の中村賢二郎氏が執筆された「研究史」では、これを受けて引き続き研究史の関心が、思想史的研究を別とすれば、都市宗教改革史に移行した経過と、さらにその研究史におけるメラー説の意義、そして

シリング・スクリブナー・ブラディラを中心に最近の動向が紹介され、本書の主題である宗教改革の社会学的分析についての方向づけがされているのである。

さて第二章以下では南から順にドイツの六都市の改革運動が分析される。

まず森田安一氏によってコンスタントのケースが扱われている。この都市では民主的体制(ツンフト支配)が成立していた結果、改革運動と民主化運動の結合が見られない点に特徴があり、改革は公開討論会を通じて実施された。この方式の持つ性格と機能が分析され、とりわけ世論形成という点でゲノッセンシャフトの性格の強い都市の改革運動に有効なパターンであったことが示されている。

第三章は前岡良爾氏によるメミンゲンの考察である。ここではブリックレの説を受けて、宗教改革と農民戦争、都市と農村の関連に焦点が当てられている。

まずこの都市はツンフト支配体制であるが、実質的に門閥が支配していたこと、療院領を中心に都市領邦が形成されたが、そこでもゲノッセンシャフトの自治が展開していた点があげられる。そして各階層の